

バレエ音楽「大草原の伝説」（作曲：トレス・カジュガリエフ）

■□■アラン・ブリバエフ氏による解説の翻訳です■□■

この曲の題材となった「伝説」は、カザフスタンではよく知られた物語であり、物語に登場するバヤン・スルとコズィ・コルペシュという恋人たちは、永遠の愛を象徴している。この物語に魅了されたトレス・カジュガリエフは、バレエ音楽の作曲に着手し、何年もの歳月をそれに費やした。彼が亡くなるかなり前から、すでに4曲の組曲が存在していたが、不運なことに、カジュガリエフは47歳という若さで世を去ったため、結局、一つの完成された組曲として作品を残すことはできなかった。

トレス・カジュガリエフ（1949－1996）は、カザフスタンを代表する作曲家の一人である。彼は、モスクワ音楽院とカザフスタンで学び、その後、長年にわたってカザフスタンで働いた。カジュガリエフは主に劇場の仕事に従事し、映画や舞台のための効果音楽などを作曲した。彼の音楽は、カザフスタンの民族音楽と現代的なオーケストラのハーモニーを融合させた様式を持っている。その曲調は、時には、ストラヴィンスキーやショスタコーヴィチを彷彿させるものである。また、カジュガリエフはジャズにも傾倒しており、自分の作品にジャズの複雑なハーモニーを好んで取り入れた。カジュガリエフは、劇場の編曲者として、また、教師としても働いていたので、その短い一生のうちに、あまり多くの作品を作曲することはできなかった。そのため、彼の作品数は限られている。しかし、バレエ音楽「大草原の伝説」をはじめ、今日残されているいくつかの作品は、真に珠玉の傑作である。

今回、大阪で演奏されるのは、次の2曲である。

序奏：非常に美しく、神々の存在を感じさせる風景、すなわち、カザフスタンの美しく、果てしない大草原の描写である。中間部では、悲しい運命を背負った一組の若い恋人たちを表す悲劇的な旋律が奏でられる。やがてその悲しみは鎮まり、冒頭部が再現される。全体を通して、壮大な大草原の叙事詩と、自然の美しさが感じられる作品である。

交響的スケルツォ：2曲目は「キズクー」という副題を持つ交響的スケルツォである。「キズクー」とは、カザフ語で「女性を迫りかける」という意味で、

カザフスタンやキルギスタンの伝統的な馬術競技を表す言葉である。キズクーには、確かに馬術競技（地方によっては、「アットチャビシュ」と呼ばれている競技）の要素もかなり含まれているが、実際には「キス・ゲーム」と見なされる場合が多い。

このゲームは、通常、次のように行われる。馬に乗った若い男性が、ある特定の場所（スタート地点）で待機する。同じく馬に乗った若い女性が、前述の男性の後方の、ある一定の距離を隔てた場所から馬を走り出させる。女性が男性を通過した時点で、男性は自分の馬を走り出させることができる。女性と男性は、少し離れた場所にあるゴール地点に向かって馬を走らせる。もし、両者がゴール地点に到達する前に、男性が女性に追いつくことができれば、男性の勝ちになり、男性は女性を引きよせて彼女にキスすることができる。しかし、ゴール地点に到達するまでに男性が女性に追いつくことができなければ、（先にゴールに到達した）女性は方向転換して、反対にスタート地点に向かって男性を追いかける。女性が男性に追いつくことができれば、女性の勝ちになり、彼女は鞭で彼を打つことができる。

この曲は非常に軽快で速いテンポを持ち、オーケストラ曲としての色彩が極めて豊かである。また、その見事な楽器の使い方ゆえに、オーケストラのための短いコンチェルトとも言うことができる。この作品が大変有名になり人気を博したことで、カジュガリエフの名前は不滅のものとなった。

2012年10月30日